

文學その内面を説く

文藝春秋社

清水弘文堂

寺田透

文學その内面と外界

# 文学その内面と外界

(1970年増補版)

著者 寺田透

東大仏文卒(1937)

著書 バルザック人間喜劇の平土間から、わが中世、ランボー着色版画集私解(現代思潮社)、ドラクロワ(東京大学出版会)、ルオー(平凡社)、詩のありか、評論I、II、III、以下続刊(思潮社)、ドラクロワ(東京大学出版会)、ルオー(平凡社)、芸術の理路(河出)、思想と造型(筑摩)。

訳書 ヴァレリー、バルザック、ランボー等多数。

著者との  
約定によ  
り無検印

## 文学その内面と外界

昭和四五年二月一〇日発行

定価二、二〇〇円

著者 寺田透

発行者 清水秋夫

印刷所 光明社

発行所 株式会社 清水弘文堂書房

東京都千代田区神田猿樂町二ノ四  
小黒ビル電話(二九三)九七〇八

▲落丁・乱丁本はお取替えします▼

目次

第一部

小説	三
リヤリズムの諸相	三
バルザックとスタンダール	三
日本の近代的リアリズムの方法	六
——自然主義の創作方法論を中心に——	六
私小説および私小説論	一三
心境小説・私小説	一四
鷗外の私小説	一四
秋聲の私小説	一六
スターリンの言語学説	一七

日本語の問題	二九
「文体論」のためのノート	三四
漱石の文体	三四
『虞美人草』	三四
『草枕』の文章	三四
芥川龍之介の文体	三五
芥川龍之介の近代精神	三五
近代文学と日本語	三六
——文体論的に、特に二葉亭の場合——	三六
第 二 部	
現代社会と文学	三九
文学と思想	三九

問題作の理解	三六
文芸批評の問題	三五五
芸術家と芸人	三七三
人間存在における悲劇と喜劇	四〇三
ニヒリズムの周辺	四二〇

あとがき

一九七〇年版あとがき

文学その内面と外界 第一部



## 小説

小説について考えるのは、どこから始めてもよさそうである。そのかわり最善の糸口というものもなさそうに見える。醇乎たる小説の理想的典型というようなものはないからだ。そういうと、小説を美の形態でなければならぬと考えたギュスターヴ・フローベルやイワン・トゥルゲーネフの作品や作品の彫琢を知っている人々は、怪訝の念をなすだろう。あそこに芸術でありながら、同時に人間と社会に関する強い関心の形でもあった文学形態の見本があるではないか。同時代を素材としながら、作者がその作品に対する強い関係は、もし神があるとすれば、神のこの世に対する関係と等しくなければならぬ、作品の内部のすべてを宰領しながら作品の表に見えてはならぬ、そう考えて、その考えに自分をささげた小説家があるではないか、と言って。

しかし、すでに再々述べたことだが、かれらの作品を、フローベルの作品ならこれをバルザックの作品に、トゥルゲーネフの作品ならこれをドストイェフスキーの作品に比較してみると、ずい分と濃厚にかれらの気質にもとづかかれらの作品の限界が感じられるのである。強いて言えば、自己限定による以外美の産出を考えることができません、そうして産み出される美に安心を求めようとする——自己の個人性の扨拭を念願するという形でこのうしろに自己に執した、陰性の個性が感じられるのである。しかもこのふたりのあいだですらその個性の宏量の度に高下があること

を誰が感じないだろう。

実際小説ほど、作者と作品の相対的關係というものはつきり意識させる芸術はないのである。それはたしかに絵においてもセザンヌの絵はルノワールの絵でもなく、モネの絵でもないということとは明白に見てとれるが、しかし絵はそれぞれが一つのものである。誰かの作品である前にまずものなのだ。それが作品と作者の個性の相関々係を強く感じさせない為の仲立ちとなる。ところが、小説は、読者がその想像裡において生活してみることのできる人生を提供することを目的とした人間の作為である。従って小説によってわれわれは自然物のような物を提供されるというより、一つの人生に対する生き方を提供されるのであって、ことは多分に道德的な問題であり、個性のひずみを受ける。

こういうふうに生活とか人生とか道徳とかいうことになる、僕らは、唯一つの、そして万人に共通の生活の場、通常現実と呼ばれているものを、まず想起せざるをえない。そのなかで、あるいは運命的に、あるいは意志的にひとがさまざまに相異なる生き方を荷って生きる広い一つの場というものを想起せざるをえないのだ。いろんな生活があるものだとわかれわれ通常の実感も、ある職業の人としての自覚も、それにもとづく智慧の深化、技術の研磨も、決してこの唯一で共有の場を崩壊させるようにはたらくものではなく、元来そういう場を、浮世とか世間とかいう名で意識することが刺戟となつてそれらの成立したものと事情をいよいよ広汎に、いよいよ確実にわがものとさせるにすぎない。わけのわかつた人間にはそうであればこそなれる。ある道の達人がほかの道の秘訣を容易に合点するのもそうであればこそ可能なのだ。

単なる生活人としても、ある職業の人としても、又民族の一員としても、いづれにせよ僕らのうちには、この唯一で共有の生活の場に対する信頼が意識的であると無意識的であるとを問わず、打ち消すべくもなく存しているのであつて、僕らのたましいは、行住坐臥、はつきりした形を描き出すには至らないまでも、その場によって生きようとし

ている。いやすでに生きている。親しい人の身の上をしるふとか、そうしたのだったらさらに望ましかつたであろう他の自分の行為を思ひえがくことに頭を奪われるとか、実際に起つた事件を如実に思ひ描こうがための半ば虚構の分析を行うとかいうことは、みな想像裡のものでありながら、誰もが等しく抱いているその種の生あればこそ可能な、またその種の生の場の出来事である。

小説家の提供するあらゆる情況あらゆる行為も、この場で生き、この場がなければ生きられないのだが、しかしこの場の広さに照し合わせると、それらはそれぞれ一つの個性によつて組合わされ統制されたある場合にすぎないことをわれわれはいやでも感じる。なぜかという小説は、他のいかなる芸術にもましてわれわれに、われわれの生きる現実の広さ、それが抱く多様に関心を向けさせるような性質をもつジャンルでありながら、同時にこの広汎で不定形で超個性的な生活の場の意識を限定するようにはたらくからである。これに反して彫刻や音楽は、われわれを視覚や聴覚、あるいはそれに加えるに運動感覚や触覚のみによつて生きる存在としてしまふ。あるいはわれわれの全存在によつて生を与えられ、強められた視覚や聴覚や運動感覚や触覚そのものにしてしまふ。ところが小説は、生身のわれわれより敏感で、行動半径が大きくはあるにしても、本質的にはこの世で生きるわれわれと次元の同じあるものにわれわれを再びするのであつて、われわれをわれわれの性能のうちの一つによつて統一純化するといふようなことはない。われわれは小説によつて、世にあらがう存在にさせられることはなく、さらに世に求めるところある、いわば世の中とうまの合つた存在たらしめられるのだ。われわれが現実のうちに、スタウローギンの人物を見出したり、ラスティニャクの傾向を見出したりするのは、小説に準じてわれわれが現実を作りかえるといふより、むしろ小説によつて作りかえられたわれわれが現実に入りすることである。別の言い方をすれば、小説の与える感銘を現実のなかへ分解することである。かくてわれわれの限定された生活の場の意識は、限定されたことによつてかえつて鋭く鮮か

に、その小説をすら背後において扱って行く……

それだけでもすでに醇平たる小説の理想的典型というようなのは考えがたい仕儀となると言うべきだろう。なぜなら、小説は小説の中にとどまることを、われわれに許さないのだから。——そのうえ、同じ理由によって、一つのジャンルを考えるについては是非実地に知らねばならないと思わせる作品を、小説ほど沢山擁しているジャンルはないということにもなる。それらは誰にしたって、十分読んだと言いきることは望みがないほどともと数多いのだが、単に数が多いためにわれわれを絶望させるばかりでなく、それらはそれぞれ他に掻き消される恐れのない独特の要素、独特の構造、細部ならびに全体の独特の性格をもっていて、しかも同じ世界に、あの想像裡の人間生活の場に、ひとをみちびくのである。そのためにひとはただそつがないという程度の小説汎論を書くために読む必要のある小説だけでさえすでに無数だと思わないわけには行かないのだ。

今日では常識となつた見解の教えるように、果して芸術作品の生涯はつねに一回きりのもので、同じものは二度と作られないというのが本当なら、すべての芸術上のジャンルが、これを正當に手落ちなく考えるためには、到底実地に知ることなど望むべくもないほど多数の作品を擁しているというのが実情だろう。けれども詩をとってみても、造型美術をとってみても、よい作品に触れたからと言って、いまさらそれらの世界の広さ豊かさ多様さに驚き、詩や、造型美術というジャンルを定義することは望むべからざることだとは誰も考えない。それは詩や造型美術が、作者の属する時代の差異、国籍の差異、個性の差異を凌いで、一つの純粋性、一つの理想をめざしているから、それが享受者たるわれわれに感じられるからである。それらはそれらの本質によってわれわれを納得させているからである。万葉集や唐詩やフランス象徴詩のあいだにわれわれが差異をみとめるにしても、その差異を示す矢の一方の端は、同じ詩という中心を指して、それらが相集つて詩の共和国ともいふべきものを形作る場合をわれわれに楽しく夢想

させるからである。

ところがそのように小説の共和国などというものをわれわれは夢想することができらうか。——できないと言いたいのには僕だけではなからう。その理由は、小説が最初述べたように、ひとをその想像裡において実生活さながらに生活させることを目的としているということにある。というわけは、実生活というものは、そのなかにしか何物もないもので、自己や社会からの脱出すらも、もしそれが実現すれば、実生活のうちに組み入れられざるをえないものであって、それはその他の何かに俟ってはじめて成立するものではないからである。インテリゲンツィヤというのは実生活のほかに精神の生活あるいは少くも精神的な生活への要求を持つものだとすることを語る小説が最近も現れたが、しかしインテリゲンツィヤが健康になり、真に新しい時代を切りひらいて行くためには——その産出物によって新しいものの見方、ものを作り出す新たな喜びを現代と次代に教えるためには、実生活と精神生活という風に生活を二元的に見ずに、かれのいわゆる実生活をその精神的要求によって裏づけ、再組織する必要がある。実生活そのものを精神生活化する、あるいは精神的生活をしか生活しない必要があるのに違いない。人間が厖大な機械の部分品化され、その意見もその行為も代置可能なものであることがますます要求され、それを拒むものには隠遁か神経症しか約束されない傾向の顕著な現代にあって、こういう考えを述べることは、ずい分と滑稽な時代錯誤ときかれるかも知れないが、生活が二つに分れているという感慨自体すでに、本来一つであるべきものがそうでなくなっていることへの歎きではないか。

説

もし実生活というものが、そういう風に単一化への拭いきれぬ願望をもつものなら、当然又すべてであろう、他の援助を必要とせぬまでにひとり豊饒でありたいと願うはずであって、従って実生活は、好き勝手に夢見られるかぎり、みずから一つの王国でありたいと考えていると言わなくてはならない。小説がひとに営ませる生活も、あらかじ

小

め精神病理学的障害以外には障害の起らないように定められた環境でいとなまれるのであるから、人間の実生活のみずから一つの、他に類例も支柱もない王国であろうとする願望は小説によって満されるばかりでなく、かえってけしかけられさえする筈である。

これが、僕が小説の共和国という考えはついに成り立たない夢想だと考える理由だが、これはただ受け身な読者の立場に立つての感想の値打ちしかないものだとは考えない。大小説の作者はつねに「世紀の絵」を、あるいは千八百何十年代の代表的場面を、あるいは究極的に真実な人間の運命を、あるいは小説として書く以外どう酬いられようもない個人の苦悩を描こうとしたのであって、そのかぎりでは（さきに見たあの単一な生の場合というものの意識への依存にもかかわらず）、作者の無意識な希求は、他に小説がないことに向けられているといえるだろう。——こういう言い方は大雑把な推定にすぎないとしても、なお細かく見るとこういうことがある。——小説において僕らが生きるのは、たとえば『ゴリオおやじ』においては、おやじゴリオばかりではなく、ラスティニャクでもあれば、ヴォートランでもあるし、又傍役ジャンション、ミシヨノーでもある。又たとえば『行人』においては一郎でもあれば一郎の弟でもあり、妻でもある。ということは、ラスティニャクにおいて、二郎において、それ以外にはもはや生活はないように一つの生活を生きるわれわれが、おやじゴリオにおいて、一郎において、他から眺められる自分を生きるということである。また、二郎においてラスティニャクにおいて、われわれは、一郎や一郎の友人、ゴリオやヴォートランに眺められるということもある。

他人の眼にさらされ、他人の手にさえぎられながらもなお自分の好むように、あるいは進んで荷う自分の運命の指の示すように、個性的な仕事に従い、何物かを作り出し、ひとを生かして行くことが生活であるなら、こうして小説がわれわれに課する生き方は、生活の実相そのままだと言って差支えないが、これはすでに読者が作者の課した

ものを荷い、その命のままに動くなどという域を脱することはるかところで、文字の表していない多くのことを引きずり出し、これに魂を与え、躍動させ、みずから想像―創造生活をいとなむということである。作者のえがいた下絵をもとにして、本格的絵画を作り出すことである。批評家が、作者の見出している以上にはるかに深い意味を、作品の細部、あるいは全体の形象のうちから見出しえたという自信を抱く場合のあるのは、その享受生活が、このように生産生活でもありうるからなのである。

本が書かれただけではまだ小説は成りたない、というのは、読者をえなくてはただ活字の排列が定着されたにすぎないということではなく、読者をえても、読者が、かれを待ちも上げる事件に対する期待にまず鼻孔をふくらませ、それから個々の細部の叙述にその情熱を移入し、これを生命ある堅固なものにし、最後に、言葉という抽象記号の排列の全体を、普通人間がこの世の手にふれることも一望のもとに納めることもできない現実を一つの形ある実在する全体と感ずるように、これを生き育て、またこれによって自分が変えられうる具体的存在に化しうるようになってくれば、小説とは言えないことである。この比喩は、われわれがわれわれの人生を一つの形ある生きた全体として表象しながら、その表象のなかからもっとも鮮明にもっとも潑刺と、尊敬する人物やわれわれを魅した人間や拒もうとしても注目せざるをえなかった人間が躍り出て来るのと同じように、小説の全体がわれわれに残す映像のうち、特に鮮明に、われわれに謎を課した人物、われわれが深い想いをこめて考察せざるをえなかった人物、異様な美を現していると見えた人物、われわれには不可能なくらい明快に行動するがしかしわれわれと深部においては同質であるような人物の映像が動きまわり、現実について考えるわれわれの脳裡に移り住むに至るといふ小説閲読の経験にまで押しひろげることができよう。この点で小説の読者は又一種の作者なのである。そして小説は素材―材質にすぎないのである。

このことを小林秀雄はこう言いあらわした。「小説を書くといふ仕事の根柢には小説に慣れ切つて了つた人々がつひ忘れがちな一つの大きな虚構が横つてゐるのであつて、それは何かといふと、小説家は実生活の模造品を言葉で作り上げ、読者に、あたかも実際にその模造の生活を生活してゐる様な錯覚を起させねばならないといふ虚構である。

ところが詩には、かういふ小説の持つ、或は持たねばならぬ虚構がないのである。少くとも詩は、かかる虚構を必要とせぬ人間の歌声といふものを、その極限の形式としてゐる芸術だ。だから詩は、どんな低級なものでも、それが歌である限り、詩の読者は、詩人の使用する言葉の広い意味でのリズムにより、直接歌といふ生まな事件に参加するのであつて、その点、詩人はリアリズムといふ技法を表現上気掛けないにかかはらず、詩の読者には断然これを要求してゐると言へる。

だから詩は空想的なもの、小説は現実的なものといふ偏見は、詩と小説との表現形式に関する分析の不足から來てゐると言へる。詩人がロマンスでもなければ、小説がリアリストなでもない。詩といふ表現形式の外観がロマンスチックであり、小説といふ表現形式の外観がリアリストチックであるに過ぎない。小説家の観察が豊富になり正確になればなるほど、読者はこの観察の力に乗せられて、小説中の架空の出来事と現実の出来事を弁別し難くなる。従つて小説は強力な小説であればあるほどその力は遠心的に拡がって、現実社会との連繋が広く固くなる印象を読者に与へる。小説といふものは元來さういふ仕組に出來てゐるのだが、詩は、言葉があたかも実質的な音とか色とかの様に人の心に直接作用しなければならぬものであるから、勢ひ純粹な詩形といふものは、言葉の秩序自体が独立し、完成した有機的な世界を自ら形造る傾向を取らざるを得ない。而も詩が純粹になればなるほどその内容は確定した対象を離れ、言語的に限定し難いものとならざるを得ないのが詩といふものの元來の仕組なのである。」(全集第二卷「現代

この引用はすでに十分に長く、しかもその主題は詩であつて小説ではないのだが、小説を考えようとするといかにその対照物として詩を考えたくなるのが自然かということについて暗示することなしとしないし、またこの思考はかなり快いのであえてこれだけ引用する気になつたのだが、さらに全集第四巻『詩について』から次の引用を行おうと思う。——断るまでもなく、僕は小林がここで前の引用におけるのと同じことを語っているのを知つていて、この引用を行うのだ。というのはこの文章は同じことを語りながら、やがて見るその結果によつて、僕に、この小説論の前置きの途上でもかく自分の見解を述べてみたい別の問題を提起しているからである。——「小説を読む人は、そこに描き出された事物や事件や人物を実際に見る様な気がする。小説に於けるレアリスムとは、さういふ錯覚が錯覚として首尾一貫してゐる、正確で合理的であるといふ意味であるが、詩に於いてレアリスムといふ言葉を使ふとすれば、これは全く性質が違つて来る。詩の魅力は正確には限定出来ぬものだが、それは錯覚ではない。詩は小説の様に先づ読者の頭脳に訴へるものではない。小説は一事件の生ま生ましい観念を与へるが、詩は一つの生まな事件である。私達は、詩の魅力に対しては、生理的にも観念的にも即座に応じねばならぬ。冒険小説を読む子供は、息を殺し、身動きもしない。歌は子供を踊らすであらう。」

冒険小説を読む子供は、息を殺し、身動きもしないという観察は十分本当であらうか。僕はことりとも音を立てずに物語に夢中になつている子供が案外体を楽にしているのに驚くのだ。筋肉はどういう風にでも動き出す用意があるみたいで、不動ながら明けひろげの感じがする。かれはやみなしに物を食べるために手と口を動かしていることさえあるだらう。僕はその姿勢を見て、これはあらゆる情熱に道を与えている姿だと思ふ。

あらゆる情熱。そうだ、さきほど僕は小説が与え喚す生活の豊饒な単一性の意識といふことを言つたが、実際小説というものは、あれこれと読みくらべて品評するものによつてはその使命が満足に展開されるのではなく、しばらく